

あとがき

この三月三日から一三日にかけて、クレール巡礼の旅に出かけた。総勢一四名、メンバーはいずれ劣らぬクレール愛好家である。

クレールがチュニジアの風景に「色彩」を発見した、と日記で述べているのは、よく知られたエピソードであり、今回はそのチュニス、カイルアンを皮切りに、チューリッヒ、ベルン、バーゼルと訪れた。とくに、クレールの眠る墓地に近いベルン郊外のパウル・クレールセンターは圧巻であった。ここは、遺族から寄贈されたコレクションを中心に、クレールの全作品九八〇〇点のうち半数近い四〇〇〇点あまりを所有している。そして、そのうちから二五〇点前後の作品を常時展示しているのである。

当館の学芸員で、名前からわかるように、日本人の研究者奥田修さんは、すでに一〇年近くこのクレールセンターに勤めていて、私とも面識がある。奥田さんは、二時間にわたって、われわれを案内してくれた。

その日の午後、私たち夫婦は、奥田さんに招かれ、ひろびろとした学芸部の室内に通された。クレールに関する膨大な資料のなかには、佐谷画廊のクレール展カタログ(一九九〇)も、ちゃんと納まっている。もちろん、親交のあった芸術家たちの文献などが、じつに充実していて、しかもそれらは整然と分類されており、必要に応じていつでも利用できるようなシステムになっている。

いまから一七年前の一九八九年三月、私は妻と二人でパリからベルンに向かった。クレールの子息フェリックス・クレールに会うためである。私は四年を費やしてヨーロッパ、ニューヨーク、そして日本の画廊からクレールの作品を購入し、念願だったパウル・クレール展を私の画廊で開催する目途がついたのだ。会期も決まり準備はできたので、そのあいさつを兼ねての訪問であった。フェリックスとは懇意の土肥美夫さんの紹介もあって、フェリックスは私たちをあたたかくもてなしてくれた。いまもありありと思い出すことができるひとときであった。それは、瀧口先生がフェリックスと談笑したのと同じ場所、同じ部屋でもある。私たちは瀧口先生も見たであろう同じ作品を目にすることができたのである。

クレールセンター訪問で思い出したもうひとつは、その瀧口先生のことであった。先生の御宅を訪ねると書斎に通される。そこは片づけなければひとが座る空間さえ見あたらないほどに、本やオブジェやいろいろな物に占領されていて、とても整然としたとはいえる状態ではなかった。にもかかわらず、しばらくして気づくと、それらがみな、あるべきところにあってオーケストラのように響きあっていた、あの空間である。

二つの部屋は、少しも似てはいない。しかし私はそこに共通するある雰囲気だけがただよっていたのを肌で感じたのである。この感じをことばでいいあらわすことは、とてもむずかしい。しかし、これは私にとってたいへん重要な暗示なのだと受けとめている。私

のライフワーク「オマージュ瀧口修造展」は、そうした暗示が具体化したものであろう。

このオマージュ展が、わがライフワークになろうなどとは、当時さほど深く考えてはいなかったように思う。敬愛する瀧口先生の作品展をふくめ、先生とは厚い交友関係にあった画家たちの個展をシリーズでとりあげようというものであった。

この目論見は、うまくあたったようであった。しかし、それは半分ほど。回を重ねるにつれて、作家や関係者のかたがたから、身にあまるほどの話をきく機会にめぐまれ、もともとの私の企画と重なり、それは確信になったのである。瀧口先生の全体像が一挙にひろがった。私の予想をはるかに超えるものであった。浮かんできたアイデアは、その場でノートに書きこんだ。私のライフワークの骨格ができあがったのである。画商冥利につきるとはこうしたことをいうのだろう。

今後のオマージュ瀧口修造展の予定は、一〇月に大辻清司、来年は前田常作、そして瀧口綾子を予定している。

私のノートには、このほか多くの作家たちの名前が記されている。このところ、体力にいささか自信がもてなくなってきた。とはいえ、オマージュ展は、できる限りつづけようと思う。

武満徹、サム・フランシス、アンリ・ミショーなどは、ぜひ実現したい企画である。オマージュ展以外の企画としては、二〇〇七年一月に志村ふくみ展が決まっており、清水九兵衛、榎本和子、田中清光展などへの期待もある。

南画廊から独立して三〇年。紆余曲折はあったにせよ、現代美術の画商として歩んでくることができた。これも瀧口修造、三好達治をはじめ、じつに多くの方々にみちびかれた結果にほかならない。道中には、信頼していた人物に裏切られたり、齟齬をきたすようなできごとに悩まされたりといったようなことも当然ながら経験したが、なによりも、作家の方々、顧客の方々の支援にささえられながらここまで歩んでこられた喜びを、この場に記しておきたい。

本書はここ数年、数種の雑誌に書いたものをまとめた。いずれも画廊経営の過程で考えたり、講演したりしたものである。いきおい、いくつかのテーマは重複することもあり、文意のあいまいな箇所にも気づいた始末であった。そこで十数年来の知己である天野尊博さんに相談をもちかけ、かれに文章を整えてもらうことになった。天野さんは『コレクション瀧口修造』の担当者であり、本書の刊行にさいしても、多々労をとっていただいた。

資料の整理、図版の選択にはスタッフの山田恵の尽力によるところが大きい。また、パートナーとして私を永年ささえてきてくれた妻祇子は、一昨年、「なずなの花」と題し、小さな絵や本をあつめた展覧会や音楽とのコラボレーションなど、彼女独自の企画展を発足させた。来年四月には第四回目の展覧会を予定している。